

道を求めるようになった。「このような動向の中で、卓越した政治力を持つ章三が、政友・民政兩派提携の事業の主導的役割を担うように」なり、「県下政治・経済界の統合者」へと昇りつめていった——という叙述である。恐慌が地方政財界にどのような影響を及ぼしたかよく示されているといえるだろう。党派対立が政党を活気づけ、政党内閣への志向を強めるといった時代はもはや過ぎ去ってしまったのである。今や彼らは対立にかわって統合を求めはじめた。そして政民兩党の間にさしたるイデオロギ―上の差がない以上、経済的利害の統合は二大政党の対立そのものを形骸化する方向に進んでいくはずである。恐慌下における地方政財界の再編成はおそらく鳥取以外でも同様の過程を辿ったものと思われる。若干の印刷ミスが惜しまれるが、いわゆる地方名望家というものが何であったのかを知るうえで、本書は一読に値する書物であると考ええる。なお同書の執筆は篠村昭二、小谷進、鈴木実の各氏がそれぞれ分担され、徳永職男、松尾尊允、浜崎洋三の三氏が監修にあたられたことを記しておきたい。

(A5判 三五二頁 一九七八年 六月)

米原章三伝刊行会 二五〇〇円
(永井 和 京都大学大学院生)

古代学協会編

『西洋古代史論集Ⅲ』

古典時代の諸相』

第二次大戦後欧米古代史学界において発表された重要な論文を訳出して、その研究成果を吸収することを目的として編まれた『西洋古代史論集』は、この第三巻をもって一応完結する。先史時代・古代オリエンを扱った第一巻『古代文化の形成と発展』、ギリシアと初期ローマを扱った第二巻『古代国家の展開』の後を受けた本書には、ローマ末期(二編)、ビュザンティオン(二編)、カロリング朝(二編)、古代ロシア(二編)の、計六編の論文が収められている。

第一論文A・モミリアーノ「キリスト教とローマ帝国の衰亡」(秀村欣二訳)は、講義論文集「The Conflict between Paganism and Christianity in the Fourth Century」(Oxford, 1963)の序説として執筆されたものである。従って短いながらも、

博学をもって知られる著者の本領が発揮された論理明晰な好論である。ローマ帝国衰退の要因論諸説を手際よく紹介した後で、教授はローマ帝国の没落とキリスト教の関連性に、今一度注意を喚起する。少なくとも、教会が最優秀者を吸引することによってローマ国家を弱体化したことは事実である。また、教会は帝国西部においては蛮族と交渉をもって、崩壊しつつある帝国に取って代ったが、東部における教会は、蛮族との戦いにおいて帝国を支持した。即ち帝国に対する教会の態度に明らかな地域差が見られることを、著者は指摘する。

第二論文A・H・M・ジョーンズ「ローマ帝国の衰退」(杉村貞臣訳)も、第一論文と同様のテーマを扱っている。著者は、数多いローマ衰退原因論の中から、特に次の三点を取り上げる。第一は心理学的要因で、古典古代社会を支えていた市民精神が衰退すると共に、キリスト教をはじめとする個人的・神秘的宗教が盛んになり、隠遁主義の風潮が広まったことである。第二は経済的要因で、農民層の没落と耕地面積の縮小、及び軍人・官吏・聖職者などの非生産的な人口の増加に伴う「民力の不足」が

挙げられる。第三点として著者は、帝国の西方と東方の状況を比較しつつ、東方帝国が安泰であったにも拘らず西方帝国のみが崩壊したことを示し、その要因を様々な面から解明しようと試みている。

第三論文J・L・ティアル「ユスティニアヌス帝時代の軍隊における異民族」(杉村貞臣訳)は、ユスティニアヌス一世時代のローマ帝国軍における「異民族」の比重が、時代が下るにつれて質量両面で増大していることを、主としてプロコピウスの記述を典拠として論じている。ティアルによると、異民族の割合が急に増加した最大の原因は、五四一年からのペストの大流行による人口減少であるという。

第四論文「カロリング朝の軍隊における自由人」(石川武訳)の著者H・ダンネンバウアーは、いわゆる「国王自由人学説」の主唱者の一人である。フランク時代の自由人がゲルマン時代の自由人の末裔ではなくて、フランク王権のもとで新たに作り出されたものであると主張する著者は、本論文においても、カロリング朝の勅令にあらわれ、軍隊を構成していたと言われる「自由人」が、古典学説のいう「一般自由人」

ではなくて、「王領地に住むがゆえに軍役と貢租の義務を負っている」いわゆる「国王自由人」であると推定している。

第五論文H・H・トレチャーク「最古のヘルスカヤ・ゼムリヤ」の居住民の起源について」及び第六論文ヴァローニン「チハノフ」(一〇—一三世紀のロシア文化発展の途)(共に清水陸夫訳)は、わが国において従来ほとんど取り上げられることのなかった古代ロシアを扱う、非常に興味深い論考である。議論そのものは複雑であるから、論文の末尾に訳者が付された懇切な解説を参照して頂きたい。

本書に収められた六編の論考のうちには、普通「西洋古代史」には含まれないものも一、二あるが、既成概念に捉われない幅広い「古代学」の標榜が、古代学協会の方針である。ただ、本論集全三巻を通じて、収録論文の扱う領域がややかたよっていることが気になるが——例えばローマ史に関して言えば、ごく初期と帝国末期に関する論考のみである——紙幅の制約とわが国における古代史研究の現状に照らせば、多くを望むことは困難であろう。今後とも、より大規模な形で、この種の問題提起的な翻訳

論文集が刊行されることを、切望する次第である。

(A五判 二〇二頁 一九七八年九月
東京大学出版会 三六〇〇円)
(大西陸子 京都大学大学院生)

『史林』投稿規定

◇資格 本会会員であること

◇投稿受付原稿の種類、長さなど

○研究論文・研究ノート

四〇〇字詰五〇枚程度

研究論文には四〇〇字以内の「要約」と、「英文要約」を添付のこと(研究ノートには両方とも不要)

○学会動向・批判と反省

四〇〇字詰三〇枚以内

○書評 四〇〇字詰二〇枚以内

○紹介 四〇〇字詰三枚程度